

NEW

Visual Studio.NET/.NET Framework関連ツール新製品レビュー

PRODUCTS



UltraWebGrid for .NET

待望の更新可能なWeb用グリッドコントロール

秋月巖ソリューション事務所
秋月 巖
AKIZUKI, Iwao

動作OS Windows 2000/XP 対応開発環境 Visual Studio.NET 備考 Internet Information Services 5.0以降
価格 54,000円 (税別、ダウンロード販売価格)、68,000円 (税別、パッケージ販売価格)

問合せ グレープシティ株式会社
TEL 022-373-0360 URL <http://www.grapecity.com/>
FAX 022-373-1625 MAIL sales@grapecity.com

不可能を可能にする コントロール

グレープシティ株式会社の「UltraWebGrid for .NET」はASP.NET用のWebフォームコントロールである。Webフォームコントロールを利用することで、WebアプリケーションをWindowsアプリケーションのようにビジュアルで開発できることは、よく知られている。しかし、メーカーが宣伝するほどには、それが単純に開発効率の向上につながることは、経験のある開発者なら簡単に想像できるだろう。

私は今まで、自分が使いたくなるコントロールが発表されるまではWebフォームを使う必要がないと公言してきた。そして、私が使いたくなるコント

ロールの例として、表形式でデータベースの内容を編集できるコントロールをあげたことがある。UltraWebGrid for .NETは、まさにこの機能を実現するWebフォームコントロールである。つまり、このコントロール次第で、私自身がWebフォームを実際の開発で使用するか否かが決まることになる。

まず、最初に結論を言ってしまう。私はこのコントロールが発売されたことで、Webフォームを使用することになるだろう。このコントロールが提供する機能は、まったくもって素晴らしい。今まで事実上不可能だった処理が、このコントロールによって可能になる。コンポーネントプログラミングの醍醐味は、まさにこの“今まで不可能だっ

たことが可能になる”という点である。

しかし、私はこのコントロールの使用を最小限に控え、このコントロールを使用しないWebページでは、従来のスクリプト埋め込み型のプログラミングをするだろう。

優れた機能と問題点

その理由をいくつか述べる。このコントロールの構造はかなり複雑であり、学習はそれほど楽ではない。しかし、得られる効果を考えれば、この問題は大了ことではない。もっと、大きな問題点は、このコントロールの実装が複雑であり、そしてクライアント環境に依存しすぎている点である。

もちろん、クライアント環境に依存することで、負荷がクライアントにかかることが問題なのではない。クロスブラウザの条件が厳しくなることが問題なのである。実際、このコントロールに付属するデータ更新のサンプルを最新のNetscape Navigatorで使用すると、データの更新機能は有効にならな

本稿で使用した環境

O S | Windows XP Professional (SP1)
開発環境 | Visual Studio.NET Enterprise Architect
C P U | Pentium 4 1.2Ghz
メモリ | 256MB
その他 | Internet Information Services 5.1

い。DHTMLを利用したクライアント側のプログラムコードはかなり複雑なので、Internet Explorer（以下IE）がバージョンアップしたときに、どれだけ動作の互換性が保証されるか疑問が残る。

■高度すぎるクライアント

DHTMLアプリケーションとクロスブラウザの限界

経験的にブラウザがバージョンアップしたときの互換性の問題は、ActiveXコントロールなどのHTML埋め込みコントロールやサーバープログラムよりも、クライアントスクリプトの実行環境に依存するということがわかっている。

私の言っていることを理解してもらうために、UltraWebGrid for .NETがどのような製品なのかを、もう少し説明しておく必要があるだろう。

通常、Webフォームコントロールは、サーバー側で処理した結果をWebクライアントにHTMLコードとして返す機能を提供するものだと考えられている。この場合のHTMLコードとは表示データと考えることができる。

しかし、UltraWebGrid for .NETがサーバー側で処理した結果としてWebブラウザに返すのは、DHTMLアプリケーションである。つまり、UltraWebGrid for .NETはサーバー側で動的にアプリケーションを生成して、それをクライアントに送り返すコントロールだと言える。したがって、その動作はクライアントのスクリプト実行環境に完全に依存する。

UltraWebGrid for .NET自体はクロスブラウザに対応しているので、ブラウザに応じて生成するアプリケーションを変更するが、それは完全な互換性がとれているわけではない。その能力を最高に発揮するのはIE5.5以降のブラウザ

で表示した場合であり、他の環境に対しては機能を縮小しながら、破綻のない処理を行なうだけである。

UltraWebGrid for .NETは「Internet Explorerバージョン5.5以降」「Netscape 6.0以降」、そして「これらのブラウザの旧バージョン」と「その他すべてのブラウザ」というように3種類にWebブラウザを分類し、それに応じて生成するコードを変更する。後者2つは互換性モードだと言える。

IE5.5以降ではフルモードで動作するはずだとはいえ、もし今後、IEのオブジェクトモデルに大きな変更があった場合も、このコントロールは最新のIEをIE5.5の上位互換として判断するはずなので、問題が発生する可能性がある。ただ、IEのDHTMLはすでに成熟段階にあると考えられるので、その可能性は高くないだろう。

とはいえ、DHTMLの生成部分がコントロールによってカプセル化されているため、開発者にとって問題へ対処する技術的な術がないことは恐怖となるだろう。ユーザーに新しいブラウザは使わないようお願いするか、グレースティ社が対応したバージョンを提供するのを待つしかない。もちろん、新しいバージョンを使用するためには、追加の料金を支払うことになるだろう。しかし、むしろ追加料金を払ってもよいから、確実に提供してほしいものである。

■とはいえ、これはひとつのソリューションである

ここまで書いてきて気付いたのだが、DHTMLアプリケーションを送り返すWebフォームコントロールがあるならば、JavaアプレットやActiveXコントロールをブラウザに送り返すWebフォームコントロールを作ることも可能であ

る。もちろん、Webフォームコントロールの内部では、これらのコンポーネントをロードするHTMLを生成するのである。

ところで、このUltraWebGrid for .NETが提供する機能は豊富だが、そのもつ意味は今まで以上に大きい。JavaはクライアントランタイムがWindows XPに標準搭載されなかったことで、インターネットで環境を問わずに利用できるというものではなくなった。ActiveXコントロールは認証を受けていないかぎり、初回使用時にダイアログボックスが出てしまうし、Windows環境以外では使用できない。

また、.NET対応のWindowsアプリケーションは動的なダウンロード実行ができるはずだったが、.NET Frameworkのセキュリティの初期設定値がサービスパックのリリース以降で変更されたため、インターネットからアクセスしてシームレスに使用できる環境ではなくなった。そう考えると、結局、高機能なインターネットアプリケーションを作るにはWebブラウザの機能の範囲内でやる以外になくなった。となると、クライアントで高度に処理を行なう場合のもっとも有力な選択肢がDHTMLだということになる。つまり、UltraWebGrid for .NETのようなDHTMLアプリケーションを生成するWebフォームコントロールは、その互換性に翻弄される一方で、DHTMLコードを自動的に吐き出してくれるのがメリットだということになる。しかも、運がよければクロスブラウザ機能は快適に動作してくれるだろう。

■UltraWebGrid for .NETはただのWebフォーム用コントロールではない

では、UltraWebGrid for .NETはどのようなDHTMLアプリケーションを生